

平成 18 年度卒業設計優秀作品の選定経過と講評

大阪市立大学工学部建築学科　2007 年 03 月 23 日

1. はじめに

平成 18 年度卒業設計作品は 2 月 19 日（月）正午を締め切りとして提出された。同月 21 日午前中に建築学科教員による学科内判定会議をおこなった。同日午後より、学内外委員による卒業設計優秀作品選定委員会ならびに卒業設計優秀作品選定公開審査会を工学部中講義室で行った。その経過をまとめておく。

2. 選定経緯と総評

2-1. 学内判定会

選定対象作品は合計 29 編であった。学内判定会においては、各教員による成績判定を集計して、各学生の可否を確認するのが主な役割である。その集計の単純な平均によって本年度は 6 名の「優秀作品候補」が決定された。これはあくまでも目安程度のものであり、それら「候補」は、次の卒業設計優秀作品選定委員会において「候補」である旨を記されるだけである。

2-2. 外部選定会ならびに外部講評会

卒業設計優秀作品選定委員会は、先にもふれたように非常勤講師を中心とした学外委員と、学科内から選抜された教員によってとりおこなわれるものである。各自持ち点を 6 として、3 つ以内の作品に自由裁量で配分する形式をとっている。本年度選定委員は以下の通りである。

学内委員	学外委員
谷口与史也（建築構造分野）	菅　正太郎(工業製図非常勤講師)*
木内　龍彦（建築防災分野）***	種村　俊昭(設計演習非常勤講師)
梅宮　典子（建築環境工学分野）	志柿　敦啓（設計演習非常勤講師）
杉山　茂一（建築計画分野）	松本　正（設計演習非常勤講師）
藤本　益美（建築計画分野）	三谷　幸司(設計演習非常勤講師)
徳尾野　徹（建築計画分野）	宮本　佳明（設計演習非常勤講師）*
横山　俊祐（建築デザイン分野・委員長）	山内　靖朗(卒業設計非常勤講師)
中谷　礼仁（建築デザイン分野）	阿久津　友嗣（建築家）**

＊はコメントのみ出席、**は非公式参加、***は諸般の事情により欠席

これら委員のいずれかによって配点された作品を、次の優秀作品選定公開審査会での審査対象とした。今年度は11作品が選定対象に上った。また運営に建築学科4、3、2 回生、修士数名が協力した。記して謝意とする。

3. 卒業設計優秀作品選定公開審査会講評

同会は、優秀作品決定の選定プロセスをすべての学生に公開するものである。優秀とされる作品が、委員によっていかに論理づけられ決定されていくのかを見ることはスリリングであり、教育効果も極めて高い。

3-1. 公開審査会の流れ

公開審査会においては、委員長の挨拶後、得票が多かった者から順に、主に投票した委員がその作品をどういった点から推薦するかを述べ、必要に応じ、学生との質疑応答を行った。こうして、11 作品についての審査を進めた。以下がその作品である（得点順）。

	菅	種村	松本	志柿	三谷	阿久津	山内	横山	中谷	杉山	藤本	徳尾野	梅宮	谷口	合計
儀部　真二		4		3	4							3		1	15
黒木　悠真		1	1		1.5	2		2		3	2				12.5

桜間　万里子			1	1			4	1	2	1					10
鈴木　一也	2									1		2	2		7
広瀬　和也	2		1	2							2				7
貝野　悠	2		1	1					2						6
宮田　賀章			2					1				1		1	5
西野　雄一郎										1	3				4
田中　貴士													4		4
富家　直香								1							1
松元　伸郎						0.5									0.5

3-2. 卒業設計優秀作品の選定

結果として、卒業設計最優秀作品を 1 作品、優秀作品を 2 作品選定した。選定の基準は本学科の卒業設計に対する基本的方向性を、教育的効果の高い作品によって示すことである。まず挙げられた 11 作品の中から点数やテーマ性、プログラムの緻密さ、総合的な評価から選考委員の推薦によってさらに選考が絞られた。まず得票点が最高であった儀部作品については、卒業設計優秀作品として選定することが妥当であろうという意見でまとまった。優秀作品については、最優秀作品を補完し作品のバリエーションの幅を広めることが意識された。優劣の基準を広瀬・貝野作品を〈水上住居系〉として、黒木・桜間作品を〈都市分散配置系〉として議論が行われた。

水上住居系のうち広瀬作品は、造形力は評価されたものの企画設定自体に疑問があるとされた。貝野作品は水上のみがデザインされ水位下が全く未検討であったことが建築的完成度を低めていると指摘された。長い論議の末、水上生活システムの複合的完成度において長けた貝野作品が優秀作となった。

都市分散配置系においては、黒木作品はその図面の美しさ等が評価されたものの、大都心部の中に建てられる小学校として素朴にすぎることが指摘された。桜間作品は問題設定・テーマ性がより現実的、挑戦的であり、公道の扱いに大きな無理があるものの、意欲的な計画提案として評価され、優秀作となった。

4. あとがき

本年度は小粒ではあったが、バランスのとれた作品がならんだ。提出期限についてもさしたる問題はなく、自ら解決できないような問題設定もなく、破綻ない完成を見せた作品が多かったのが印象的であった。またテーマにおいても仏教寺院の托鉢システムを再検討した鈴木案など、独自のテーマ設定も少数ではあるが行われたことは心強い。これらはこの 7 年間ほど改革検討を続けてきた卒業設計のレギュレーション作成、取り組みのプログラムがしだいに反映された結果であると思われる。学生側も教員側も各年の結果をふまえてたゆまないフィードバックを行ってきた。また昨年度より卒業設計専門の講師として参加いただいた山内先生の熱意ある指導の賜物であるとも言えよう。

いまだ傑出した作品は出現していないが、都市／建築の現在に問題をみつけ、それを解決しようとする方向性は、学生のほとんど大部分が共有していた。素朴かつ妄想的な作品がきわめて少数であったことは美点としてあげられるだろう。地味ではあるけれども着実な現実的解決を行おうとする方向性は大阪市立大学建築学科の一つの方向性となったと言ってもよいであろう。ただ現実はさらに複雑怪奇なものであること、過去の人がなした問題の尻拭い以外の可能性をも設計行為は含んでいるということをくれぐれもお忘れなきよう。

（文責　建築デザイン　中谷礼仁）以上

本年度の担当指導員は、谷口与史也（構造）、梅宮典子（環境）、徳尾野徹（計画）